

わたしの聖戦

◎◎女性が働くところのこと◎◎◎◎90

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

歴史と医療

今から1万年前、いわゆる狩猟採集が人々の生活手段だった頃、当然医療らしきものはなく、妊娠出産はひどく危険な行為だった。日本では縄文時代に相当するが、多産多死は世界共通であったろう。

そのような場合、人々は祈ったり呪文を唱えたりして不幸で哀しい出来事を取り越えようとした。ときには神に最も近いとされるシャーマンたちによって悲しみを癒してきた確かな事実がある。

農耕牧畜時代になると、今度は集落ができ、社会が形成されていく。両者

が足並みを揃えて発達を遂げる一方で、人々が集まって固定化していくにつれ、次には感染症が広がっていく。空気感染や経口感染など、菌やウイルスの都合の良い感染経路で人から人へ、あるいは牧畜から牧畜へと病気は拡散していき、多くの人々を苦しめ命を奪っていった。もちろんそれらが感染症であるということとさえ知らずに。

宗教が導入され、僧侶や寺院が力を持つようになれば、今度はかれらが病に苦しむ人に手を差し伸べはじめた。本来宗教と医療はセットであるはずで、それを歴史はちゃんと証明してくれている。祈禱やまじないといった古代からの行為も引き続き人々を支え、江戸時代の後期になってもそれは続く。たとえば、赤いものは痘瘡を退治してくれる

幕末まで継承され、少なくとも「こうすれば治る」という安心感の人々に与える役割を果たした。明治に入って、というより世界的に工業化時代を迎え労働者階級ができると、貧富の差が歴然と表面化していく。一部の感染症には対応できたものの、結核や性病などは依然として猛威をふるい若い命を容赦なく奪った。

農耕牧畜時代になると、今度は集落ができて……



ると信じられ、痘瘡にかかると部屋に赤い幔幕を張り、寝具から着物のれんまですべて赤いもので統一した。病人のみならず看護する者も赤い衣服を身につけることを強いられた。この習慣は江戸中期から種痘が普及する

表面化していく。一部の感染症には対応できたものの、結核や性病などは依然として猛威をふるい若い命を容赦なく奪った。このころは単一病因論とい

って起こると信じられていたし、ドイツの細菌学が世界を圧巻していたころでもあるから、貧困と病原菌さえなくなれば病気は格段に減少すると信じられてもいた。

そして現代である。医療のみならず科学技術や

文明は一挙に発展を遂げ、かつては手探りであったものが少しずつ解明されてきている。それとともに医学の進歩は目覚ましく、一時は感染症は克服できたところ、実際はそう甘くはない。単一病因論から多因子病因論へと変わり、生活習慣病や加齢性病変が私たちの前に立ちふさがっている。

医療は専門分化が進み、次々と新しい検査法や治療法が開発されているが、何だかいたちごっこのような気がしないでもない。

片や、一万年前からあるシャーマニズムは廃れたかといえはそんなことはない。突然の不幸に対応できるのは科学ではなく言葉だったり読経だったりする。本物は残るといふことだろうか。

時代は巡る。そろそろ本気で歴史を学んでみなければと思っている。

イラスト・三浦義雄